

Braintech Library Report

ブレインテック・ライブラリー・レポート

Vol.10



創刊10号
記念特別対談

小野永貴 氏
筑波大学 図書館情報メディア系

×

村上恭子 氏
東京学芸大学附属世田谷中学校

創刊10号記念特別対談

Part.1 図書館は、学校の中で最も懐の深い場所であってほしい

Part.2 システムから探る図書館の輪郭

Vol.10発行にあたり

Braintech Library Report

創刊10号記念特別対談

これまで Braintech Library Report では、「情報館」をはじめとするブレインテックの製品を活用している図書館の事例を紹介してきました。今回は、Braintech Library Report が ついに Vol.10 を迎えたことを記念して、特別な対談を企画しました。

小野 永貴 氏 × 村上 恭子 氏

筑波大学の図書館情報メディア系にて助教を務め、情報教育や学校図書館に関する研究に携わる小野永貴さん。彼にとっての原点は、母校である東京学芸大学附属世田谷中学校の図書館だったといいます。Braintech Library Report の Vol.6 でも取り上げたこの図書館を再び訪ね、当時から生徒たちを見守っていた司書の村上恭子さんとともに、小野さんが図書館に通うひとりの生徒だった頃から、研究者として次世代の教育を担う今に至るまでのお話を伺いました。

(聞き手：関 乃里子／執筆：吉村 香織)

Part.1 図書館は、学校の中で最も懐の深い場所であってほしい

図書館が、僕にとっての原風景

——まず、小野さんが生徒だった頃、この図書館はどのような場所だったのでしょうか。

小野：今よりずっと地味な図書館だったと思うんです、写真を見ても。でも、機能としては二十数年前から、学生の主体的な学びを支援する場所でした。それは今でこそラーニングコモンズと名前がつけられていますけど、1999年という世情を思えば画期的でした。いろんなことをやっていた空間だったんです。だからといって空間が荒れているかといえば、そんなことはなくて。

村上：どうして荒れないのか不思議でしたよね。ただ、今考えると、楽しいけれどそれだけの場所にならな



かったのは、やっぱり本の持つ力、ひいては図書館が持つ力だと思いますね。自分の学びにも役立つし、憩いの場としても活用できる。

小野：図書館の光景として、窓際に腰かけて文学を読んでいる人がいれば、漫画を読んでいる人がいて、長机のところで友達と一緒にしゃべりしている人やパソコンでゲームをやっている人がいて……さまざまな利用者が混在していたし、共存していた。いわゆる「ゾーニング」が自然と生まれていたのだと思います。学校生活という日常の中に図書館があったんです。図書館があるのは校舎の中心地というわけではないのに、なぜかあの渡り廊下を渡ってしまうんですよね。ひとつには村上さんとしゃべるのが楽しいんですよ。図書館の“機能”のひとつとして、村上さんの存在がありました。

村上：私自身、「ここは図書館だから静かにしなさい」と言ったことは一度もないんですよ。印象に残っているのが、保護者会の帰りかなにかに、とある生徒のお母さんが図書館に寄ってくれた時のこと。「毎日、息子が『今日も図書館にいた』と言うんですよ。友達もいなくて一人寂しくしているのかと思って覗いてみたら、こういう賑やかな図書館だったんだと知って安心しました」と帰っていきました。



小野：これが僕にとっての原風景だから、図書館は静かであるべきで、賑やかなのは“らしくない”と言われると悲しいんですよね。図書館の居心地がよかったことが今の研究にも繋がっているので、僕はあの光景が間違っていたとは思いません。中には、ひとりになれる空間は好きだけれど静かすぎると気になってしまう、という子も一定数います。あの図書館はたぶん、書架を隔てた向こう側に話し声があるけれど、資料に囲まれているからこそパーソナルスペースが確保されているというのが、ちょうどいいゾーニングだったんじゃないかと思うんです。

村上：意図的なものではないけど、柱や棚の位置によって死角が生まれるんです。でも、死角が好きだね、子供たちは。隠れて弁当食べてるワルもいました。

小野：でも、強くは怒らないですよ。

村上：もちろん注意はします。でも、「今は信頼されているから先生たちの見回りもないけど、もしこういうことが度重なれば、自分で自分の首を絞めることになるよね、どうする？」と尋ねれば、わかってもらえるんです。自分のせいで、ここにある空間が失われるとなったら悪いよね、やめておこうとなります。

——自分たちで自分たちの居場所を守っていきこうっていう、生徒たちによるある種の“自治”があったわけですね。

村上：学校図書館というのは、さまざまな感情を抱えた青少年が、ここは自分の場所かと思える懐の深さを備えた場所でありたいと思っています。

小野：これがうまく機能しているのは、村上さんが学校の中で信頼関係を築いているからなんだと思うんですよ。

村上：そこは大事ですね。先生方に信頼してもらえているからこそ、できることは多いです。

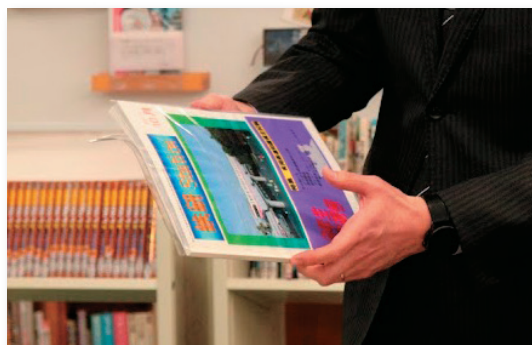
対等である環境によって育まれたもの

小野：校風といってしまうとそれまでなんですけど、先生

方が生徒を尊重してくれるんですよね。悪いことが起こったら指導するけれども、トラブルを防ぐために先んじて抑圧してしまうと、表現や活動に制限が生まれてしまいます。学校の資源を活用して、先生では思いつかない視点でなにかやりたいことがあるかもしれないと、そういう相手として生徒を見ている学校なんです。だからこそいろんな活動ができたんじゃないかと思います。

村上：先生の考え方や、教科の特性もあるでしょうが、図書館で授業をすると、教室での授業以上に、さまざまな“想定外”が起こるじゃないですか。そういう思ってもみないことを楽しんでもくれる先生は、図書館を活用してくれますね。

小野：僕が立ち上げた鉄道研究同好会の会誌も、村上さんに交渉して図書館に置いてもらうことになったんですよ。生徒の成果物を資料の一つとして管理するというのも今でこそ重要視されていますけど、当時、生徒の視点では図書館は買ってきた本を置く場所だったから、生徒が勝手に作った雑誌を置いてもらえるとは思ってませんでした。



——小野さんは、図書館に興味があって大学を選んだのですか？それとも、大学を選んだ中で図書館にいきついたのですか？

村上：情報の先生になりたいって言ってたよね。

小野：よく覚えていますね。高校生になって進路を考える頃、図書館からは関心が離れてしまっていたんです。かわりにコンピューターに興味を持ち、情報教育に携わりたいと思うようになりました。教員になるだけがすべてではないと思い、大学での研究や民間企業への就職の道も考え、進学先を検討していました。ただ、当時は、通っていた高校では独自に情報教育が行われていたものの、まだ全国的には「情報」が正式な教科になる直前の時代であり、今ほどメジャーな専攻領域ではなかったため、国立大学の中では選択肢がほとんどありませんでした。僕はコン

コンピューターの技術だけを学びたいとは思わなかったんですね。教育学や子供たちの心理や発達、法制度についてもバランスよく学べて教員免許をとれるところを探していたら、筑波大学図書館情報専門学群を見つけたんです。図書館を目指したわけではなかったけど、入ってみたらまわりの図書館が好きな友人たちから刺激をうけ、自分の中学時代の経験も重なり、自ずと情報教育と学校図書館が密接な存在であることに気付いたのですよ。

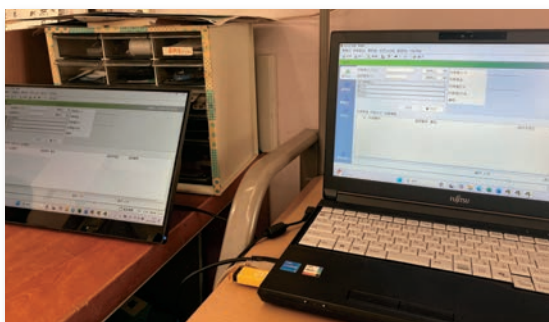


Part.2 システムから探る図書館の輪郭

図書館の中にシステムが 在ることへの気づき

——小野さんが図書館システムと出会ったのは、ここで図書委員をしていた時だそうですね。

小野：小学校は、昔ながらの学校図書館で、紙の貸出カードで管理していました。だから、中学にあがって、図書委員として図書館システムに触れた時は衝撃を受けました。当時、図書委員はカウンターのパソコンで貸出や返却をおこなっていたのですが、出来心で、勝手にその他の業務画面も見えて楽しんでいました。メインメニューを見ただけでも、貸出や返却の裏側にさまざまな業務があるんだとわかって、資料の受入や組織化といった過程があるなんて想像もしていなかっただけに、目から鱗でした。専門的な仕事だって気付きを得たスタートがそこでした。



村上：私が働きだした頃は、こういう小さな図書館に、システムを入れて蔵書を管理するなんてあり得ないだろうと思っていました。でも、時勢や学校の方針が追い風になって、予算がついて、数あるソフトウェアを比較検討した中で「情報館」と出会ったんです。

小野：業務用の機能に触れさせてもらっていたことはもちろん、「情報館」は検索画面もいわゆる子供向け

じゃなかったのがよかったんですよ。子供でも操作できるように簡略化されたシステムではなかったからこそ、対等に扱ってくれているのだと感ずることができました。

——図書委員として「情報館」を使っていた方の感想を直接聞くことができて嬉しいです。

図書館のさまざまな価値を可視化する

——図書館システムについて感じていることや、こうなっていけばいいのに、と思うことがあれば教えてください。

小野：中高時代の僕は、貸出の統計上では大したことないけれど、図書館を活用していろんなものを作ったという意味で、たぶんアウトカムでは一番だったと思います。このアウトカムをどうしたら可視化して測れるんだろうなというのは常々考えています、長期的にね。貸出冊数は重要な指標のひとつではあるけれど、それだけで図書館の価値が決まるわけではないですから。たとえば禁帯出の本を館内で読むことだって、貸出冊数には反映されません。

——興味深いですが、学校図書館がどう人を育てたかをしめす指標を、システムをとおして伝えるのはとても難しそうです。システムに蓄積されているデータでいうと、検索履歴はもっと活用してもらえる余地があると思います。

小野：検索履歴の分析は大事ですね。貸出履歴も必要だけれど、貸出に表出されない行動のほうが多いわけだから、データとして存在している検索履歴を活用しないのはもったいないです。

村上：検索システムで探したけれど読みたい本がなかったことが、検索履歴を通してわかると、その本が必要だったことに私も気づけます。

小野：検索に失敗した履歴も欲しいです、結果が0件だったとか。それこそが真のニーズを研究できると思うので。

——なるほど。それはおもしろそうです。

村上：たくさん資料がある中で一冊を「選ぶ」というのが大事だと思います。来年度からは、子供たちひとりひとりに与えられたGIGA端末から、自発的にOPACを活用して資料を検索できるように、先生方とも連携して進めていく予定なので、「選ぶ」という行為をより当たり前のこととして浸透させていきたいです。



小野：そろそろ図書館は貸出冊数に囚われるところから脱却しないと、本当の価値を言語化・数値化することはできません。図書館システムが持っているデータをいろんな指標に落とし込むというのが重要で、そもそも生徒がどういう情報を必要としているのか、という貸出の手前の表出されない情報行動をちゃんと分析できるよう数値化したいです。それが図書館がおこなっているサービスと、どういうふうに関連しているのかというのが、いろいろな活動の価値を示せる根拠になると思うんですね。

村上：たしかに。

小野：それから、学校図書館の価値として、僕は「滞在」に注目したいです。小中高校というのは、履修している科目の時間だけ行けばいい大学とは異なり、みんな同じ時間に登校し、決まった時間まで帰れません。だからこそ、どういうところに「滞在」して学びを深めるのか、交流するのか。生徒の自由な「滞在」のクオリティを高められる環境を目指すことが、学校図書館の使命になり得ると思います。そういうところに切り込んで、データをとっていくと、附中図書館のようなこういう空間や機能が当たり前にあるべきだっていうことを示していけるんじゃないでしょうか。

——その図書館が、生徒にとって良質な「滞在」を提供できているかどうか、はかることができるのは、来館回

数や滞在時間でしょか。



小野：図書館を利用すると一口に言っても、授業のために訪れることと、自分で来たくて来ることは全然違うと思いますし。

村上：探究学習のために図書館を利用するのも大事だけれど、それだけになるのは違うよね。利用者側に選択権があって、どのように使ってもいいことが図書館の基本なのかなと。

小野：そうです。学校図書館を、探究しなければいけない空間、探究を押し付けられる空間にしてはいけないと思います。日常生活において当たり前のように来て、居心地よく過ごせて、知的好奇心が育まれていって、結果的に探究している……主体的に、みずからの意思で、探究する姿勢を身につけられる環境が本当の姿じゃないかと思っています。

村上：私は教員じゃないっていうのが、実は大きいと思うんですよ。ある意味では先生の子供を見たことがないんです。「探究」をする時には、指導してくれる先生がいるので。

小野：教員免許を持っていないけれども、学校司書として、司書の専門性を持ちつつ教育のことも語れる。現場の先生たちと対等に仕事ができる。とてもよい在り方だと僕は思ってるんです。

——どんな図書館であろうとするかによって、その価値をはかる指標も変わってくるのかもしれませんが。お二人のお話を聞いて、図書館システムはもっとさまざまな視点から、図書館の価値をはかれるデータを提供できるように努力しなければ、と感じました。

この図書館の一番の“収穫”

——みんながみんな、小野さんのような生徒ではないでしょうけれど、私たちの図書館システムと出会い、興味を持ってくれた方がいたというのは嬉しいことです。

小野：それだけ僕の人生に刺激を与えてくれたということ

ですよね。先ほど、情報教育に携わるにあたって教員になっても研究者になってもいい、どの経験もしたいと考えていたという話をしましたが、その中で、学校向けのシステムを作るという観点から情報教育に貢献するっていう選択肢があるんだと、そういう仕事があるんだと気づかせてくれたっていうのは「情報館」があったからだと思います。

村上：ブレインテックに入社する未来もあり得たってわけだ。

小野：人生で最初に、学校現場で使われている情報システムに触れたわけですからね。

——私たちのシステムが学校図書館で使われているということは、とても早い段階で子供たちに影響を与える可能性があるんだなと思うと、背筋が伸びる思いです。

小野：最後にひとつ質問なんですけど、僕が同好会や委員会を立ち上げてその会誌を図書館に置かせてほしいと交渉してきた時、村上さんはどう思ってたんですか？

村上：「よく頑張ってるな」と思っていましたよ。あの中学生が、こういうふうに育ったっていうのは、この図

書館の一番の収穫かもしれません。

小野：僕にも教え子ができて、この業界に少なからず人材を輩出したけれど、その指導の根底にあるものはこの図書館にいた頃と変わっていません。それが受け継がれていくことは純粋に嬉しいです。図書館という存在の一番のアウトカムは人材の育成だと思っているので、十年、二十年単位で、実際にこうやって人材が育成されていったっていう成果が連鎖していつてるのは、一番大きいんじゃないでしょうか。



あとがき 教え子から教え子へ——人を育てる図書館が紡ぐ系譜

今回の対談では、図書館の中原風景を共有するお二人が、そこから連なる足跡を辿ることで、図書館の価値をしめす新しい指標について考えることができました。図書館の裏方ともいえるシステムが、図書館を訪れた誰かにこれほどの影響を与えることもあるのだという気づきは、図書館システムのつくり手である私たちにとって喜ばしいことです。図書館の価値をよりいっそう高めるためのお手伝いができるよう、さらに邁進していこうと思いを新たにしました。

余談ですが、私もまた、学生時代、司書課程を履修するにあたって、小野先生にご指導いただいた教え子のひとりです。図書館とはどういった存在であるべきか、そこで働く司書はどういう視座をもつべきかを学んでいく中で、価値観が塗りかえられるのを感じました。他の誰でもない小野先生に教えられたからこそ、図書館に関わる仕事を選ぶにまで至ったのだと、強く感じています。この対談をとおして、図書館によって育まれた人がやがて教育の現場に立ち、みずからもまた図書館の中で人を育てていくという系譜の中に、私もいるんだと実感することができました。

取材の中で得られた気づきを大切にしながら、今後も、図書館システムという側面から図書館の価値をはかるための指標を探り続けていきたいです。

(執筆：株式会社ブレインテック 顧客支援グループ 吉村 香織)



PROFILE



小野 永貴 (おの はるき)

筑波大学図書館情報メディア系助教、
博士 (図書館情報学)

東京学芸大学附属世田谷中学校出身。在校中に鉄道研究部を立ち上げ、学校図書館の資料とPCを駆使して鉄道雑誌を制作し、雑誌架をお借りして発信する。さらに、生徒全体の情報活用促進を目指して情報委員会を設立し、初代委員長を担う。これらの活動実績をもとに、筑波大学図書館情報専門学群へAC入試で入学。大学院へ進学した後、国立高校の情報科教諭に就きつつ、大学教員に転身して複数の大学で教鞭を奮う。2021年より筑波大学に着任し、知識情報・図書館学類で学校図書館の科目を担当。現在は、高校情報科の検定教科書編集委員や、日本図書館情報学会の理事も務める。



村上 恭子 (むらかみ きょうこ)

東京学芸大学附属世田谷中学校図書館 司書

東京学芸大学附属世田谷中学校に非常勤の学校司書として長く勤務。2009年に東京学芸大学学校図書館運営専門委員会の一員として立ち上げた「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」を運営中。学校司書が職業として成り立つことが願い。単著に『学校図書館に司書がいたら』（少年写真新聞社）、共著に『鍛えよう、読むチカラ』（明治書院）、『子どもの読書を考える事典』（朝倉書店）など。

Braintech Library Report

Vol.10発行にあたり

Braintech Library Reportは、今号でVol.10という節目を迎えました。前身は弊社が自社製品のユーザー向けに1993年から発行する冊子「News Letter」内の「こんにちはブレインテックです」という人気の連載記事です。本紙は弊社のシステムが図書館の現場でどのように使われているかを紹介することで、システム導入を検討されている方や今使っているシステムをもっと活かしたいという方に役立つ情報を提供することを目的に発行しています。

同時にこのBraintech Library Reportは図書館システムの導入事例紹介という枠を超え、小規模図書館の知恵と工夫を紹介する読み物にもなっています。さらに、私たちブレインテック社員にとっては、普段わざわざ口に出して語られることの少ないユーザーの皆様の「思い」に取材を通して触れることができるという、大切な機会でもあるのです。

Vol.10はこれまでとは少し趣向を変え、Vol.6に登場した東京学芸大学附属世田谷中学校図書館の村上恭子氏と、同校の卒業生でもある筑波大学図書館情報メディア系の小野永貴氏の対談記事です。

「図書館は人を育てる場」である。これが、今回の取材で改めて感じたことです。そうした大事な役割を持つ図書館のために、システムにできること、私たちにできることは何なのか、今後とも真摯に考えていきたいと思います。

最後に、これまでBraintech Library Reportの発行にご協力いただいたすべての皆様に、改めて感謝を申し上げます。これからも図書館の現場の声に耳を傾け、本紙を通じてその魅力や工夫をお届けしていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

株式会社ブレインテック 広報担当 関 乃里子



✧各号でご紹介している図書館✧

- Vol.1 ・公益財団法人大倉精神文化研究所附属図書館
・沖縄キリスト教学院図書館
- Vol.2 ・国際基督教大学高等学校図書館
・医療法人社団誠馨会 千葉メディカルセンター
千葉中央看護専門学校
- Vol.3 ・学校法人東福岡学園 東福岡高等学校 東福岡自彊館中学校
・学校法人福岡学園 福岡歯科大学 情報図書館
福岡看護大学 情報図書館
福岡医療短期大学 情報図書館分室
- Vol.4 ・トヨタ博物館 図書室
・土佐町立図書館
- Vol.5 ・イエズス会聖三木図書館
・公益社団法人東京都看護協会 図書室

- Vol.6 ・湘南鎌倉医療大学 図書館
・東京学芸大学附属世田谷中学校 図書館
- Vol.7 ・同志社香里中学校・高等学校 繁真館
・大阪府立男女共同参画・青少年センター（ドーンセンター）
情報ライブラリー
- Vol.8 ・秩父宮記念スポーツ博物館・図書館
・学校法人後藤学園 武蔵野栄養専門学校
武蔵野調理師専門学校
専門学校武蔵野ファッションカレッジ
- Vol.9 ・東洋英和女学院中学部・高等部図書室
・東京海上日動火災保険株式会社 図書史料室

小規模図書館に必要なものの全部。

～中小規模の図書館に最適なベストセラー図書館システム～



✓ OPAC ひとつで何役も

資料検索だけでなく、カレンダーやお知らせ機能、ブックリスト機能などを備えたOPACは、アクセシビリティ対応・マルチデバイス(スマホ・タブレット等)対応で、そのまま図書館のホームページとしても利用可能。

✓ デジタル資料公開も OPAC で

OPACで簡易的なデジタルアーカイブの公開が可能。専用システムがなくても自館発行物や貴重資料をPDFや画像データで公開できます。

✓ 蔵書管理だけじゃない。

利用者からの問い合わせを記録・管理できる新機能「レファレンス管理」や、日々の業務を記録できる業務日誌機能を備えています。

毎月第3水曜日は
ブレインテック
オープンデー



きてね



図書館システム紹介

来て、見て、さわって！
東京/大阪ショールーム

予約
不要

図書館システム「情報館」を実際に操作できる！
そのほか図書館情報サイト「Jcross」主催イベントや
図書館関連製品の展示、体験会を開催



図書館装備用品展示



図書館関連グッズ展示



各種イベント開催

ショールームはちょっと遠い...そんな方には
オンラインイベント

事前
予約

図書館システム「情報館」のここがおすすめ
製品の特長が分かるイベントを随時開催！
イベントの最新情報はウェブサイトをご覧ください



お問い合わせはお気軽に

製品の無料トライアル、デモンストレーション、
オンライン相談を承っております。



ブレインテック・ライブラリー・レポート Vol.10

発行日／2025年10月1日

発行元／株式会社ブレインテック

〒141-0031 東京都品川区西五反田8-3-16 西五反田8丁目ビル 7F

TEL.03-4330-3655 <https://braintech.co.jp/>